

東京バッハ合唱団 月報

[第 764 号] 2026 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp Site: http://bachchor-tokyo.jp



BACH-CHOR TOKYO

Monthly Newsletter No.764

February 2026

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

世界が荒れて 手探りしながら進んでいる今こそ

遊馬 栄 (団友・元団員、在仏)

ストラスブール、2026 年元旦

大村 恵美子様、

新年あけましておめでとうございます。健やかに笑顔で毎日を送っていらっしゃると思っています。令和 8 年の干支は午ということで、縁起男になったつもりで思いを馳せさせて参ります。

時々はすべてを忘れ、雲が形を変えながら流れていく様子、紅葉から落葉への季節の変わり目、地面を被う落葉を舞い上がらせる冷たい風の音、そして気づけば深々と降り注ぐ新雪など、大昔から繰り返されてきた当たり前の自然の営みを、立ち止まって描写し残しておかなければと、焦る気持ちに駆られることがあります。

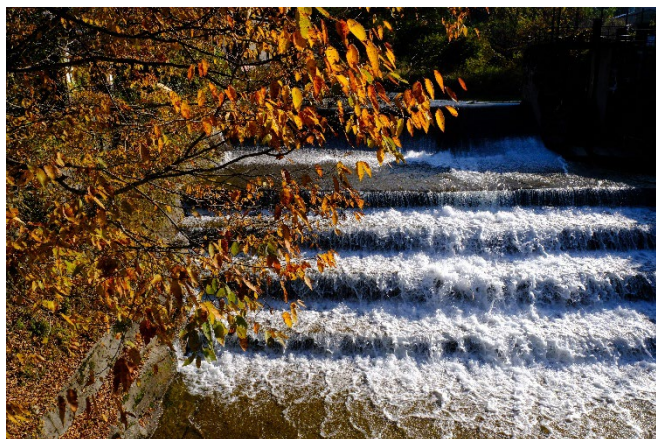
そしてこの頃は、不意に大昔に見たフィルムを思い起こして立ち止まります。

1980 年作で、“Les Dieux sont tombés sur la tête”^(注) (英語版題名 “The Gods Must Be Crazy”、日本では多分、上映されなかったのではないかと思います) という題の映画です。

[注・編集部：原語 (フランス語) 表題は、後段のあらすじを参考にしつつ強いて訳せば、『神々が頭から落ちてきた』。実際には『ミラクル・ワールド ブッシュマン』の邦題で、日本でも 1982 年に公開されたようです]

舞台はアフリカ・カラハリ砂漠。外部との接触は一切なく静かに平和な暮らをしてきた民族がありました。ある日、その頭上を二人の観光客を乗せた小型飛行機が通過し、一人が飲み干したコカ・コーラの瓶を窓か

■木曽路妻籠宿 (撮影:千葉光雄・団員、2025 年 11 月)



らポイ捨てしたことから物語が始まります。住民は、恐る恐る、見たこともない物に近づき、一人一人それを手に取りながら、結局、各人がそれぞれ違った用途を見出します。はじめは譲り合って代わり番子に使うのですが、あつという間に私利私欲が目覚まし、平和な暮らしのなかに利害の対立が芽生え、次々と不幸な事件が起きていく、という話です。

村の長老はこの事態を憂慮し、この物を持って遙か彼方に葬りに行く決心をし、旅に出ます。映画ではその旅の続きは語りませんが、現在私たち自身がさまざまな分野で続きを、それぞれ演出しているのではないかと感じます。

振り返ってみれば、いろいろと相容れぬことばかりが目立ったこの数年のように思えます。

突然表れたコロナ禍の収束はあったものの、グローバル化された経済活動の影響で異常気象が至るところで猛威を振るっています。まったく雨の降らない国では飢餓の危機にさらされている地方が多くあるのは事実です。同時に、集中豪雨による洪水で生活のすべてが流されてしまった人々の絶望感もありました。アマゾンの大森林も、平均気温があと 0.5 度上がるとサバンナ化してしまうという予測もあるそうです。COP30 は自己中心主義が勝利し、異常気象現象でさえ疑う国まで出てきました。

他方、戦国時代を思わせる覇権主義ロシアによるウクライナ侵略、またイスラエルが正義を掲げて、パレスチナの市民の安全を完全に無視しながらテロ組織ハマス壊滅の作戦を行使したこと。ガザ地域では多くの市民、中でも女性や子供の犠牲者が出ました。ガザ再建プロジェクトでは、当事者パレスチナを除いて、リヴィエラのような高級リゾート計画がまじめに話されているそうです。狂っています。これを La loi de la jungle [ジャングルの法則 (弱肉強食の世界): 編集部] と呼ぶのでしょうか。人間の愚かさは、自分本位に考えることから始まり、強者に付度しようという意志の弱さにあるのでしょうか。

月報 2026 年 2 月号 CONTENTS

- ・この 5 年のこと一連載随想 5 周年 (大村健二) p. 2-3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [60] (大野博人) p. 4



■早春賦（撮影：千葉光雄・団員 2021/2/23）

先秋に妻と二人で日本を廻ってきました。妻は勿論、日本人である私も、日本の自然の豊かさ：四季それぞれの雲、田園風景、樹林、紅葉、山脈、澄んだ川、のどかな山里、そして日本人の弛まざる追求心：加工品の繊細さ、仕事への誇り、人々の心づかい、ルールを守る気質、などなどに心を奪われました。日本に来る外国人インバウンド数が年々増えているのは偶々ではなく、日本人という国民がそれぞれの分野で、匠を目指して頑張っているからだと確信させられました。

でも、“もったいない”とも思っています。宝の持ち腐れです。世界が荒れて手探りしながら進んでいる今こそ、日本が各々の分野で声を挙げ、凜とした姿で世界の役に立たなければならないと思います。

上に立つのではなく、道しるべになるのです。整った社会の縄文時代、競争心が芽生え始めた弥生時代、大陸文化を吸収した先導者の道、長い血まみれの戦国時代、土農工商で閉ざされた封建時代、盲滅法な覇権政治の結末、恐ろしい原爆被災、驚くべき戦後復興、19人のノーベル賞受賞者を抱える国、などなど、あらゆる時代の歴史を描いてきた日本人は、今の暗い世界を照らす街灯になるべく使命を持っていると思います。歴史は未来への鏡だといいます。毅然と立ち上がり、根拠はこれだ、と言える姿勢が求められていると思います。

お風邪をひかれませんように充分ご自愛ください。春には新芽の匂う樹林の間を、小鳥の囀りを聴きながら散歩などなさっては如何でしょう。

Kyrie Eleison……

バッハ《ミサ曲短調》BWV 232 を聴きながら、思いを馳せてみました。<ア>

<東京バッハ合唱団、団員募集>

■練習日/会場：毎週土曜日、15:30 - 17:30、荻窪教会（JR/地下鉄「荻窪」駅・南口から徒歩8分）

■団費：5000円（月額） 次回公演の曲目です。見学歓迎。ご一報の上、お気軽にお越しください。問い合わせ先、詳細はHPをご参照ください（月報タイトル内）

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanesc_words/index.htm

第124回定期演奏会 予告

— J. S. バッハ日本語演奏 大村恵美子訳詞 —

カンタータ第20番 《雷の言葉 おおなんじ永遠よ》
（いかづち） （とこしえ）

カンタータ第10番 《わが魂 主をあがめ》

カンタータ第196番 《主は覚えたもう われらを》

—2回公演—

◇荻窪公演

[日時] 2026年5月30日（土）14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 荻窪教会

◇三崎町公演

[日時] 2026年6月6日（土）14:00 開演

[会場] 日本キリスト教団 三崎町教会

—演奏者（両会場とも）—

- ・指揮：山本悠尋（やまもと・ゆきひろ）
- ・ソプラノ：藤原優花 ・アルト：中島麻紀子
- ・テノール：野中裕太 ・バス：藤田魁人
- ・管弦楽：ARS（コレギウム・アルモニオ・スペリオール・ジャパン）
- ・オルガン：田尻明葉 ・合唱：東京バッハ合唱団

— 入場無料（予約不要の予定） —

— 安曇野閑人氏の<連載随想>、5周年に感謝 —

2021年3月から2026年2月 この5年のこと

大村 健二（団員・月報担当）

表題の上の年月は何かというと、当月報の4ページ目に毎月ご寄稿くださっている安曇野閑人こと大野博人氏の、連載随想・第1回から今月号の第60回にいたるまでの、満5年を表わします。

大野氏はわれわれの古くからの友人であり、合唱団の団友・後援会員です。長く朝日新聞の外報部に所属し、世界を股に走り回った挙句に、東京本社に戻ったら要職を歴任されていたらしゃる。これでは声も掛けられない……と思っていたら、退職して信州の安曇野に隠棲なさったというので、さぞや日々の緊張からの反動で、退屈なさっているに違いないと“同情”した恵美子が、月報に何かお書きいただきたい、とお願いしたのでした。何の縛りもなしに、好き放題、想いついたときに、いつでも、と。

われわれの浅はかな同情に、幸か不幸か、乗ってくださった閑人氏との当時のメールのやり取りは最早なにも残っていませんが、毎月欠かさずの連載、紙面のぴったり1ページ分、写真1枚など、“縛り”だらけの結果はご覧の通りです。

題して『退屈するのはいそがしい』。

さらに驚いたこと……。 「締め切りは？」とのお訊ねに、当方は「でき上がったときで結構です」とお応えしたと思います。私が「月報係り」になって以来何十年か、毎月1日（ついたち）を目安とするも、出来上がったときに「発行日」だったので。月の始めも

あれば終わりになることも。さらに遅れば、2 か月合併号などということも何度かありました。ところが天下の朝日新聞OBたるもの、そうは行かなかったようで、当方は「20 日ごろを目途に」と申し上げるハメに陥ったのでした。以来、「定期便です」と、ぴったりに 20 日の日付で原稿が届くことになりました。

おかげで当編集部も、毎月 20 日になるとエンジンがかかり、月初め発行が目標（ただし、努力の）になってしまいました。読者のみなさまともども、大いに感謝している次第です。

かつて、作家の渡辺淳一さんが日経新聞に小説を連載していたおり、毎朝最初に開くのがこのページ、と言われたそうですが、おかげさまで当月報も、何人かの読者の方から「ウラ表紙から読んでいます」と告げられました。光栄です。

さて、どんな 5 年間だったのでしょうか。前掲・遊馬氏のご寄稿にも重なりますが、大げさでなく、人類にとっても歴史的な 5 年だったはずです。

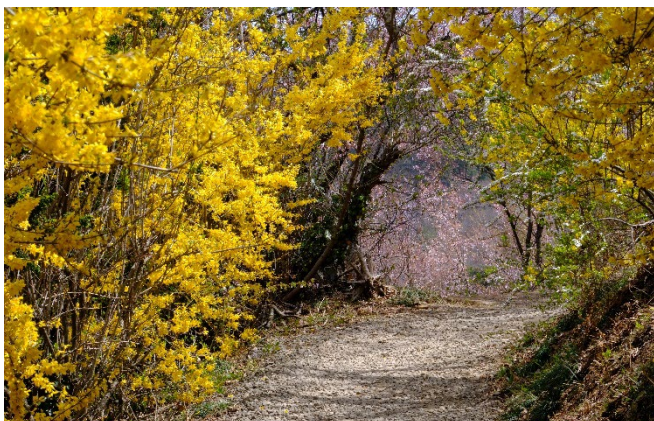
安曇野の空に向かって開いた窓

「死にそうなほど退屈な毎日になるぞ」、と書き始められた初回の原稿をいただいたのは、2021 年の 2 月でした。タイトルは「退屈するのはいそがしい」。以降、連載そのものの題名になったものです（第 705 号、2021 年 3 月号、初回は 3 ページ目でした）。

【バックナンバーは、当回 HP からお読みいただけます。月報タイトル内（1 ページ目）に、QRコードあり】

紙面の割り付け上、隅に空きができたので、そこへ後記として、「東京での生活は、いまや見えないものに覆われ、鬱陶しい限りですが、突然、安曇野にわれわれのドッペルゲンガーが現れて、ちがう世界の空気を代わりに吸ってくれている、といった雄大な効能がありそうです」、との拙文を添えさせて戴きました。

「いまや見えないものに覆われ、鬱陶しい限りですが……」。5 年前を思い出してください。その前年あたりから、新型コロナなるものが、とつぜん降って沸いて大騒ぎになり、数年間、世界中に居座りました。やれ手洗いうがい、マスク着用だ、リモートワークだ、となり、挙句に「行動変容」という聞きなれない用語まで飛び出して、これには、なんとなく全体主義的な響きを感じて、身震いしたことを覚えています。



■春の山道（撮影：千葉光雄 2019/4/17）



■アルプス遠望（撮影：千葉光雄 2019/4/17）

ドッペルゲンガーの片割れにされた閑人氏にはご迷惑だったでしょうが、おりしも信州安曇野に開かれた大きな窓とその先の大空に向かって、どうぞ代わりにたっぷり深呼吸をしてください、といった切なる願いだったはずです。

悠々と流れる時

翌 2022 年 2 月 24 日、ロシアのプーチン大統領による突然のウクライナ侵攻のニュースに驚かされました。

この年の 3 月号（第 717 号）には、「雪は降る、あなたは……」（連載 [13]）をお寄せいただきました。軽妙なシャンソンの旋律に乗せて、「2 月半ば、テレビが首都圏の大雪ニュース一色になった」と、東京人のヨチヨチ歩きを面白がっていらっしやっただが、その回の「編集後記」に、筆者は、2011 年の「3・11」の大惨事と現下のコロナ・パンデミックとを引き合いに、「あの時も今も、自然の脅威を前に、さんざん人間の無力さが語られました。2 月 24 日、またも人間の無力を思い知らされています。いっそうタチが悪いことに、今度は、人間 [自然、ではなく] の脅威の前の。」と、書き添えさせていただきました。

都会で、われわれ小人（しょうじん）がガタガタ、ヨチヨチやっていると、安曇野の大地では、かつて激動の現場を数多くくぐりぬけた元記者の頭上を、悠々と時が流れていたのです。

2023 年 10 月 7 日、ハマスの一団がイスラエルを急襲し、翌日にはネタニヤフ首相がガザ地域への大規模報復を開始しました。元外報部長としては、どんな反応をしたのかと興味があつて、いま、月報バックナンバー 11 月号のウラ表紙を見返したら、ありました。連載 [33]「ざわつく読書」。「どうせおいらはヤクザな兄貴、わかっちゃいるんだ妹よ」と鼻歌を歌いながら、バルザックの読書に耽っていらっしやる。

紙面が尽きます。

西半球のトランプ大統領の連日の大活躍で、「文明変容」の気配さえ漂ってきた今日この頃、閑人氏の連載の今回は、さて、どんな展開を見せてくださるか。どうぞ、ページをめくってご覧ください。

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [60]

家事のハードル



安曇野閑人 大野 博人

これからは「ふつうのおっさん」になる――。

退職して新聞記者を辞めた2020年の春、そう宣言したら妻に軽いなされた。

「何をいまさら。前からずっとふつうのおっさんじゃない」。

言われてみればそのとおり。40年近くも同じ会社で働いていた。気づかないうちに、特派員だとか、ナントカ委員だとか、ナントカ部長だとかいう肩書きが自分のアイデンティティのようになっていた。

妻の一言で、社内でしか通用しない、はかないアイデンティティはあっさり雲散霧消した。

とはいえ「ふつうのおっさん」だけではすこしさびしい。そこで、これからは「記者」ではなく「家事手伝い」を自分の役割にすると決めた。すると、妻にまたいなされた。

『手伝い』という言葉は余計。

会社員をやっている間はほとんど家事をしなかった。あまりに忙しくて時間がなかったというのは、半分はほんとうだけれど、半分は言い訳である。男が家事をしなくても非難されることがなかった時代の空気に安住していた。後ろめたい気持ちもあった。

だから仕事を辞めたからには家事に少しは取り組みようと思ったのだが、「手伝い」という腰の引けた姿勢を鋭く突かれてしまった。

ただ、家事をやるにしても、基本動作がまったく身につけていない。もたもたするばかり。妻から手とり足とり習うしかなかった。その積み重ねで、自分が受け持つ家事はいくらか増えた。それでも、いまだに「手伝い」の域を出られないでいる。

中でもハードルが高いのが炊事。食後の洗い物は担当している。しかし料理は難関だ。包丁など調理器具の使い方、さまざまな食材の特性、調味料のさじ加減など、わからないことだらけ。小学校の家庭科の試験では100点だったけれど、何十年も台所に立ち続けた妻との技術格差はあまりに大きくて、尻込みしてしまう。

他方で、おいしいものを食べるのは好き。調理もおもしろそう。料理でかなりの腕前をふるう男性の友人



たちも少なくない。それがうらやましくもあった。

手を出したいような出したくないような。

見透かした妻に昨年、「週に一度だけ料理をしてみたら」とそそのかされ、ついその気になって水曜日のランチを引き受けてしまった。メニューを考えるだけで毎回迷走しそうなので、一皿ですむパスタに的を絞った。ネットなどで紹介されている簡単レシピに頼ればなんとかなるかも。

あまかった。基本動作さえ知らないから何度もレシピや紹介動画を見直す。そのたびに時間を浪費して、加熱しすぎたり、調味料やワインを入れ忘れたり。

それでも、まだ続いていて、これまで作ったのはざっと20種類。ミートソース、カルボナーラなどに始まり、サルシッチャ(イタリア風ソーセージ)やキノコを使ったリゾットなど少し凝ったものにも挑戦してみた。しかし、調子に乗って冷蔵庫にある材料で自己流のパスタを作ったら、出来損ないの焼きそばみたいになった。

妻は毎回、「おいしい」と言う。出来損ないの焼きそばの時も「おいしい」と言った。どうやら、褒めて育てて、もっと料理する気にさせようという魂胆らしい。

友人のフランスの人類学者、エマニュエル・トッドによると、男性が女性に対してエラそうに振る舞いだしたのは農耕が始まった1万年くらい前。とはいえその後、少しずつ女性の地位は向上を続けているようだ。速度に地域差はあるけれど、たとえばフランスの大学入学資格試験の女性合格者数は1968年からすでに男性を上回っている。その結果、妻の年収が夫を上回る夫婦もどんどん増えているという。当然、家事の平等な分担も進む。そういえば、日本でも若い世代ではそれがふつうになりつつあるようだ。

私が、この5年でパスタ作りに挑戦するまでになったのも、人類の直近1万年の歴史の流れの当然の帰結なのかもしれない。

私が「家事手伝い」から「手伝い」をはずせる日はまだ先のような気はするけれど。

* * *

さて、安曇野に移住して1年近くたったところで始めた小欄も今回で60回、ちょうど5年。パスタ同様、出来損ないもしばしばですが、ふつうのおっさんは厚かましいので、やめろと言われぬ限り、続けてしまおうです。うんざりだと感じたら、ぜひ声を上げてください。(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■左右両段の全5点、これまで作ったパスタたち (撮影と説明、調理とも：筆者)